

全体討議

○丸山 それでは全体討議に入りたいと思います。これからコメントーターの長尾先生、そして総括をしてくださる松井先生をご紹介申し上げたいと思います。

本日の全体討議でコメントーターを務めてくださいますのは長尾先生です。一般財団法人国際開発センター研究顧問でいらっしゃる、また公益財団法人グロー・バンクフロフト基金代表理事、また、その他いろいろなお仕事をなさっています。日本語教育センターのこのシンポジウムでも何度もコメントを頂戴したりしておりまして、今回も力になっていただいております。その長尾先生、本日は、セネガルからのご出張先から応援をしてくださっています。先ほど1時にお会いしたときは朝の4時でしたとおっしゃっていたので、まだ、朝早い時間ですね。どうもありがとうございます。

こちらに長尾先生の、たくさんのご業績を挙げていただきました。ご専門は、開発援助、教育評価、サステナビリティ学で、日本語教育センターは教育評価の部分でずっとご指導をいただいております。教育、それから評価関連でのご著書、それからご論文もたくさんおありで、現在、発展的評価のところでも私たち日本語教育センターが応援をいただいている先生でいらっしゃいます。

本日は長尾先生にコメントを頂戴いたしまして、全体討議を行った後に、全体の総括として国際化推進機構長、国際化推進担当副総長、そして法学部法学研究科教授の松井先生に総括をお願いする予定でございます。

本日の全体討議は、時間の制約がございますので全部ふれられるかわからないんですが、この3つについて話し合えればなと思っております。

1点目は、多様な学生が集うキャンパスでいかにグローバル・コンピテンスを育むか。それから2点目は、グローバル・コンピテンスをどのように評価するか。そして3点目、どのように学内外にその評価を、成果を可視化していくかということでございます。この全体討議のポイントが出来上がりましたのは、実は昨晩なんですけれども、そこから長尾先生が、本日の登壇者のスライド全てに目をお通しくださいませ、この3点をまとめた上でコメントを出してくださるといことで、今からスライドをお出しいたします。

それでは長尾先生、コメントどうぞよろしくお願ひいたします。

○長尾 長尾です。今日はお招きいただきありがとうございました。現在、西ア



フリカのセネガルに JICA のプロジェクトで来ているのですが、毎日日本語、フランス語、英語のごっちゃ混ぜで苦労しています、今日お話しされていることは何か私のためにやっていただいているように感じております。

本日の私の役目は、4人の先生方の報告についてコメントすることです。事前にいただいたパワーポイントを拝見して比較の表にまとめましたので共有いたします。

私がお話したいのは一番右側のコラム（長尾コメント）で、今日の全体討論の流れに従ってコメントさせていただきます。最初に皆さんの報告でグローバル・コンピテンスあるいはコンピテンシーという言葉が何回も出てきましたので、どういう考えで話しておられるのかに注目しました。コンピテンスには英語で言う Competence と Competencies の2つの意味があると思います。いわゆる総合的な概念としての Competence、これは三島先生が国際社会活動能力と括っておられて、森平先生もワンフレーズで表現されています。坂本先生と池田先生は Competence というよりも Competencies の想定で、能力の構成要素を明らかにされています。要するに Competence は統合的な概念、定義のための概念で、Competencies は構成因子を明示することによって操作化を可能にする概念です。私個人としては三島先生の整理が非常にすんなりと頭に入ってきて、討論するときには Competence タームで考えます。しかし人材育成の現場で実際に学生を指導するときにはやはり Competencies タームで細かく考える必要があると思います。

コンピテンス概念についてさらに何か付け加えるとしたら、立教大学ではグローバルリーダーを養成しようとしてされているわけですから、やはり現代的、歴史的な文脈も考慮してグローバル・コンピテンシーの議論をする必要があります。例えば、グローバル化する世界、SDGs、コロナ禍の状況、こういうものを頭のどこかに置きながら、国際社会活動能力とか、コミュニケーション能力とか、専門的対応力とかをイメージすることです。

次に、いかにグローバル・コンピテンスを育むかですが、丸山先生は「多様な学生が集うキャンパスで」という枕的表現を入れられました。そうすると私のよ

うな天邪鬼はすぐに、ではキャンパスの外はどうかと反応してしまいます。それは私が今、セネガル出張中で、キャンパスの外でストラグルしているからかも知れません。立教大学でグローバル・コンピテンスを考えると、キャンパスの中で、いろいろな授業で、いろいろなプロジェクトの文脈で検討するのはよいことだと思います。立教大学の中の小宇宙をグローバル化しようというのわかります。しかし、恐らく言っておられないけれども、4人の先生方は外に出てプロジェクトをすることも想定しておられるのではないかと思います。特に池田先生が話された、やさしい日本語で通用するのかどうか、N3の人たちがうまく適応できるのか、それを知りたいときには、大学の中の優しい人たちばかりに囲まれているのでは不十分で、キャンパスの外に出ていかなければならない。ですから2番目は、「多様な学生が集う」を抜いて、キャンパスを抜いて、グローバル・コンピテンスをどう育むかを社会的文脈の中で考えるのが大事なのではないかと考えます。その意味で、森平先生の考えておられる直接交流の場数を増やしていく、あるいは立教の学生を中国に送るといふ、キャンパスを出た取組は非常にしっくりときます。それから、合同授業を合同社会演習みたいな形で考えるフレキシビリティもやはりあったほうがいいのではないかと思います。

そこで重要なことは、グローバル・コンピテンスにはソーシャルエンゲージメントが不可欠であるという、先ほど三島先生がおっしゃっていたことです。ローカルの中にもグローバルはあるわけですし、地域のSDGsプロジェクトに、例えば日本の学生、母語の学生、上級の留学生と、N3の学生と一緒に出ていく、そこで演習として、ローカルコミュニティの授業に参加しながら、自分のグローバル・コンピテンスを鍛えていくといったことは容易に考えられるのではないかと考えます。

さらに付け加えると、今の世の中ではサステナビリティの概念が大事になってきていますが、その関連でトランスディシプリナリティという言葉が頻繁に出てきます。マルチディシプリナリーとかインターディシプリナリーを超える、トランス・ディシプリナリーの概念です。これは大学の境界を出て、外部のいろいろなステークホルダーと交わるという意味で、社会的エンゲージメントの追求の重要性を示唆しています。

最後に、グローバル・コンピテンスをどう評価するかですが、森平先生は主体性重視の観点から、自分の経験の話をされました。これは、非常に大事な点だと

思います。常に自分でリフレクティブに、リフレクシブに考えることが基本だと思っています。その上でですけれども、グローバル・コンピテンスの評価と、グローバル・コンピテンス発揮の成果の評価を区別しなければいけない。グローバル・コンピテンスの評価はどうしても資格評価みたいになってしまいます。あなたはこのコンピテンス指標に従ってどれくらいスコアがありますか、グローバル・コンピテンスが50あるのか80あるのか100なのかという話になりがちです。私の感じとしてはやはり、三島先生がやられたような、ディベートのコースでルーブリックを使ってコンピテンス発揮の成果を評価することが大事だと思います。そこでの成果はチームとして、このディベートという1つのゲームで勝つという、参加することによってある社会的な成果を出そうとすること。グローバル・コンピテンス自体の評価ではなくて、グローバル・コンピテンスを使って何をつくり出すのかの評価をするわけです。出てきた成果を評価することによって、グローバル・コンピテンスが役に立ったかどうかを問うわけです。グローバル・コンピテンスの評価を、池田先生が言うておられるようにコンピテンスモデルで追いかけることももちろん大事ですが、それに加えて、成果評価タームで考えるとさらによいと思います。

なぜそのような複合的思考が大事なのかというと、まさに最後の視点として教育成果を可視化しようとするときに、コンピテンスの話ばかりしても全然社会は見えてくれない。社会が知りたいのは、「ではそれを使って何ができたの?」、「何を作ったの?」なので、最後の可視化のところは実は可視化ではなくて、社会が認知するように図る必要だと思います。可視化は社会的認知のためですが、可視化だけを一生懸命、まるでインストルメントとかスキルみたいに追い求めても不十分で、やはりソーシャルエンゲージメントを通してステークホルダーのほうでそれを評価をし、認知することによって関与の全体が可視化されるというのがストーリーの流れになるのではないかと思います。【スライド⑥-1】

私としては大体それで言い尽くせるのですが、立教大学の取組をこの何年か見させていただいて、スーパーグローバルの取組とか、日本語教育の質的な転換とか、評価を軸に実験的、実践的に教育改革を進められる姿勢に敬意を表したいと思います。ぜひこういう取組や考え方がほかの大学にも伝わっていくといいなと思います。

以上です。

○丸山 どうもありがとうございました。本当に先生が今おっしゃってくださったように、キャンパスの外を見て、私たち、このこと、グローバル・コンピテンスのことを考えていかななくてはいけないなと思いながら、今ここにある課題をきちんと乗り越えながら、成果を評価してもらい、そして今、先生がおっしゃったような社会的認知につなげていくということを、そういうことにぜひ取り組んでいきたいなと思っているところです。

それではちょっと、こちらに少し戻しまして、本日、4人の先生方からいただきましたコメントは、今、長尾先生がおまとめくださったように、個人のレベルの中でのグローバル・コンピテンスがどのように醸成されていったか、その中で外国語学習というのがどのように関わってきたかというお話や、それからCEFRとグローバル・コンピテンスの関わりであるとか、それから社会的参画と語学学習の関わり、それから語学学習で培われる力というのが語学力というところを超えているのではないかというお話もいただきました。あとはやさしい日本語の話になっていくんですけども、今、その4人が登壇された先生方のお話、それから長尾先生からいただいたコメントを踏まえまして、全体的に、まず会場の皆様からご質問、それからコメントなどありましたらぜひお願いしたいと思います。いかがでしょうか。

すみません。参加者の皆様が見えないので、いったん、共有を切らせていただきます。ご質問、コメントのある方、ぜひ「手を挙げる」のボタンを押していただければと思います。その際にご所属とお名前をお願いいたします。パネリストの方から手が挙がっています。数野先生、お願いいたします。

○数野 日本語教育センターの数野と申します。本日は貴重なお話をありがとうございました。三島先生にお尋ねしたいと思ったんですけども、ディベートのところでチームの評価をするというのがありまして、私たちも実は日本語教育センターの初年次の留学生向けの日本語科目で、やはり協調性をつけていく必要があるということで、ディベートではないんですけども、チームで1つのグループプロジェクトをして発表の準備をしていくことをやっています。その中で個人の発表の部分も少し評価はするんですけども、主な評価はスライド自体、グループで作り上げた内容を評価するというふうにしています。ちょっと最初、その評価のしかたを決めるときに、もし協力しない学生がいたらどうしようとか、そういう心配もあったんですけども、この1年半やってみたところ、

全留学生の中で1人か2人、やや非協力的な学生がいたというのは報告があったんですけども、普段自分のことはそこまでしっかりやらないような学生であっても、すごく責任感を持って、協力もしたという声が聞こえています。英語は、日本人の学生は、どのような感じかも教えていただきたいなと思いました。

○三島 全くおっしゃるとおりです。グループで何かを行うというのはやはりどうしてもピアプレッシャーがあるんですよ。ディベートの構築はそれぞれが相談して、もちろんこれは授業内でも導線を引いていく上で、それぞれが役割を担います。これはどんな社会活動でも仕事でもそうですけれども、プロジェクトを任せられれば、数人のチームと一緒に働きながら、それぞれが役割を担って、一人一人が自分の与えられた責任を全うしないとつくり出せないような形に授業をつくっているんですね。

自分が任せられた役割を全うするという部分は、実は個人評価として授業の成績評価には入っているんです。なので評価をハイブリッド化することによって、個人で担わなければならない責任の部分は個人評価、それを合わせて互いに協力し合って、ネゴシエーションして最終的にディベートを行う、ここがチーム評価という形で、やはり怠けてやらなければ個人評価の部分は当然下がるんで、必ず結果はそこで出てしまうところがあるんですね。今のところ授業内で、非協力的で、これは全学で何クラスくらいでしょう、かなりの人数の受講生がいますけれども、全学、1年生必修なので。今のところ、参加しないと、全く協力しないということは科目管理側としても、一切そういった報告は受けていないので、現状はうまくいっているんだろうなとは思っています。

○数野 ありがとうございます。やはり、責任感が増すということでしょうかね。

○三島 そうですね。あと何か、どうも、やはり楽しいみたいです。人と関わって何かをやるというのが楽しいというのもやはりありますね。特に今、コロナ明けなのかもしれないんですけども、初めての対面が昨日、ディベートのクラスだったんですが、最初に開口聞いたのが、オンラインと対面どっちがいいか尋ねました。半数以上がオンラインと言ったんですよ。それで何でって聞いたら、大学に来るのが面倒くさいという話で、でも、じゃあ今日の授業来てくれたから、帰り際にはこの授業面白かったって言ってもらうように頑張りますと言って授業したんですよ。そしたら、チャイムが鳴っても帰らなかったんですよ、グループワークして、ずっと話してて。僕、先帰るよと言って帰ったんですよ。授業終

わったんで。結局学生は残っても、まだ打ち合わせしているわけですね。そのエンゲージメントって、オンラインではなかなか生まれえない、ある意味、熱の入り方というのがあるのかなというのはずぐく思いました。

○**数野** ありがとうございます。

○**丸山** ありがとうございます。ほかにいかがでしょうか。藤田先生ですね、どうぞお願いします。

○**藤田** ありがとうございます。先生方、本日ありがとうございます。日本語教育センターの藤田です。森平先生に伺いたいんですけども、中国語の中級1のクラスで、上海の日本語学科の学生さんと、立教で中国語を学んでいる学生さんとの活動をなさっていると伺いましたけれども、日本語の授業の中でも、よく立教の、日本人学生だけじゃないですね、日本語が話せる学生をボランティアに呼んで、留学生のクラスと一緒に活動するときがあるんですが、ボランティアの学生さんをお願いするときに、留学生の日本語レベルが初級である場合は、今、初級のレベルです、やさしい日本語で話すようにお願いしますというふうをお願いをするんです。そのときに、経験がないボランティア学生さんから、「やさしい日本語」とは何かと言われることがあるのですが、こちらはコントロールせずをお願いをしているんですね。で、ボランティアを経て、自分自身もきっと外国語の学習の経験があるにもかかわらず、ああ、日本語の学習ってこういうふうにな上手になっていくんだな、みたいなのを、きっとボランティアをすることで経験をしているように私は見えるんですが、この交流などで、例えば自分の中国語の成果をあちらの学生さんに見せて、あちらの日本語を今度は立教生が見るわけですね。その活動で、何というんでしょう、自分の中国語の成果を披露する以外に立教生が得ているものというのを先生がお感じになるものはございますでしょうか。

○**森平** 藤田先生、どうも質問ありがとうございます。一番私が求めているのは、先生がおっしゃるとおり、語学そのものではなくて、やはりモチベーションなんですね。やはり相手の、日本語を勉強している中国人学生の日本語のレベル、それから日本に対する知識、これが圧倒的なんです。なるべく先方には学年と中国語歴を伝えて、それにふさわしい日本語歴の学生や学年の学生を先方でも用意してもらっているんですけども、それでも圧倒的に向こうの日本語のほうが、我々の学生が話す中国語よりも上手なんです。それを見て自分も頑張ろうというふう

に思ってもらいたいという、そちらのほうが大きな、この場を設けている動機と
思っております。以上です。

○藤田 わかりました。ありがとうございます。

○丸山 ありがとうございます。ちょっと時間も限られているんですが、せっかく今日、長尾先生からコメント頂戴しておりますので、先ほどいただいたコメントに対して、本日まで登壇いただいた先生方からご質問、それからご意見などありましたらぜひお願いしたいと思います。三島先生、どうぞ。

○三島 長尾先生、ありがとうございます。素晴らしく明快なまとめで感銘いたしましたといえますか。僕の1点、すごく思うのは、やはり外に出る、結局、象牙の塔にならないようにする、産学のつながりのバランスが必要というのは常々思っていて、学生を外に出すというのは正直、例えば英語を教えるといっても、僕が英語を学んだときは、大半は、実際は学校じゃないんですね。大学で学んだというよりか、むしろ飲み屋で学んだことのほうが多いんじゃないかという。何でしょう、極端な話、実世界の中に飛び込んでいく、そのイレギュラー性というか、それが当たり前の世界、そういうところに、大学というかわりの外に出て、逆にそういうリソースが、我々教員が何か運営をする上でぱっとつかめるような、何でしょう、あ、こういうリソースあるんだ、何かそういうものがあつたらいいな、なんていうことはすごく思います。でもどうしても目の前にあるリソースの中から我々がつくってしまうので、それが箱庭になってしまう。その箱庭から出たいと思ったときに、先ほど言いましたけれども、いろいろなところでバトルが生じます、どうしても。その箱庭を破る戦いなんだな、なんていうのをすごく思いました。以上です、ありがとうございます。

○丸山 長尾先生からはいかがですか。今、もしかしてミュートになっているかもしれません。

○長尾 すみません、ミュートにしていました。

○丸山 ありがとうございます。

○長尾 質問ではなかったので話すつもりなかったんですけども、1つだけ言わせてください。私自身は1960年代にアメリカ社会が大きく動いたときに、アメリカに4年間留学しました。留学生としてリベラルアーツの小さな全寮制の大学に行っていたんですけども、たまたま外から講演に来た先生が、「君たち、大事なのはソーシャルエンゲージメントだよ」、と言われて、それで私はもうそ

れからずっと一生ソーシャルエンゲージメントを追いかけているような感じなんですね。

翻って、今日のシンポジウムのお話を最初に丸山先生から伺って、趣旨の説明をしていただいて、最初感じたことは、英語で来る学生にしても、N3で来る学生にしても、留学生は立教に来たときに何を求めているかということ、必ずしも立教大学のキャンパスにいることではない。むしろ立教大学を經由していろいろなところに出たいわけです。何を見るかということ、やはり東日本大震災の跡を見たわけです。あるいは水俣を見たいわけです。京都・奈良の観光を目指してくるといった時代の人たちではない、今の若い人たちは、コロナをどうやってコントロールしているか見たいのかもしれない。日本の今のありようを彼らは見に来ているのであって、立教を目指しているわけではないのです。立教は経由地なんだという意識は私はすごく大事だと思います。その見事な経由地をつくったときに、それが社会的に認知されて、立教プロジェクトモデルというのができるのではないかと思います。

○池田 じゃあすみません、それに関係して長尾先生にお伺いしたいんですけれども、長尾先生がおっしゃったように、立教大学が素晴らしい、もしも留学生という立場、留学生だけじゃなくて、日本人学生も含めて、立教大学に入った学生が、素晴らしい人生の経由地になって、その立教大学を出た人たちが何をしているのかということをもって、立教大学が社会的に認知されていくということを考えたときに、私たちが考えなきゃいけないのは、何というんでしょう、どういふうにそれを評価というか、それを蓄積していけばいいのかということ、それはすごく長期的な評価になっていくと思うんです。

一方で、これはもう本当、半分愚痴なんですけれども、私たちはすごく短期的な成果を示すものを求められる。それをさせないんだったら、もうそんなことやらせてあげないよとか、そんなことやっても何の意味もないんじゃないかみたいなものというのが今すごく多くあると感じていて、だからすごく長期的なゴールを見つつも、これが長期的なゴールにつながっている短期的な、何というんですかね、成果なんだというのを、相手を説得する評価として持っておく必要があると考えていて、その辺はどうしたらいいんでしょうか。すみません。

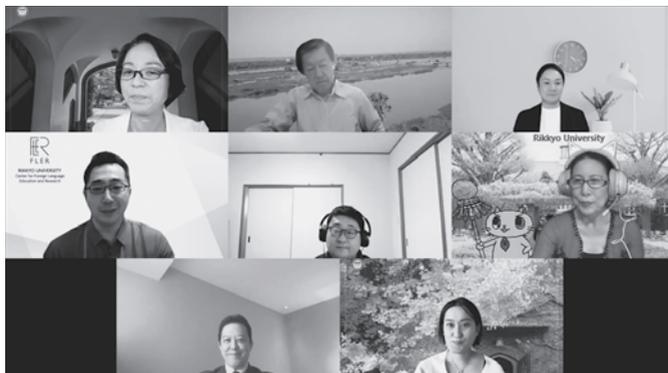
○長尾 まず最初のリアクションは、やはり丸山先生、池田先生が、成果の可視化と言われるときには、やはり学内で何とか日本語教育プログラムを認めさせる

という、そのための可視化というふうには私は意地悪に解釈してしまいます。それに対する答えは、私は卒業生、あるいはこれから立教を通っていく学生が、知的なホームカミングをすることだと思います。立教に対して。

私はアメリカのリベラルアーツの大学に行ったと言いました。ミネソタ州のカールトンという大学なんですが、非常によく考えています。まず5年ごとに、卒業生の意識を大学に向けさせます。1日だけ。10年目には目を向けさせるだけではなく、財布を開けると言うんです。財布を開けて寄附しろと。50年目が一番大事なりユニオンで、50年前に卒業したそのクラスが幾ら大学に寄附できるかというので前の年の卒業クラスと競争させるわけです。その間に、知的なホームカミングもさせる、それが一番大事なところで、例えばその大学が組織して、卒業生に対して現役の学生と一緒にどここの国に何を見に行きましょうと仕掛けるわけです。行く先には卒業生がいるわけです、迎え入れてお世話する卒業生たちです。そうやって素敵な交流の輪をどんどん広げて、それが蓄積し、累積し

【スライド⑥-1】

	森平先生 (中国語)	坂本先生 (ドイツ語)	三島先生 (英語)	池田先生 (日本語)	長尾コメント
グローバル・コンピテンシス (GC)	<ul style="list-style-type: none"> ・外国語学習や留学を通じて、他者と共存しながらコミュニケーションを回り、行動していく力 	<ul style="list-style-type: none"> ・自律的に活動する能力 ・言語・技術を相互作用的に用いる能力 ・異なる集団の中で関わりあう能力 	<ul style="list-style-type: none"> ・国際社会活動能力 (コミュニケーション能力/専門的知識/異文化理解力/批判的思考・分析能力/協調性) 	<ul style="list-style-type: none"> ・異文化間問題の検討能力 ・他者の視点・世界観を理解する能力 ・異なる文化を持つ人々と効果的な関わりを持つ能力 ・共同体の幸福と持続可能な開発のために行動する能力 	Competence と Competencies
多様な学生が集うキャンパスでいかにGCを育むか?	<ul style="list-style-type: none"> ・中国語学習を通じ、中国に対する方法と自信を習得 ・直接交流の場数 ・ロール・モデル 	<ul style="list-style-type: none"> ・機能的な学習スタイルの導入 ・基礎の段階から「プロジェクト型」授業の展開 ・学習者による自己能力チェック 	<ul style="list-style-type: none"> ・社会的活動への参画手段としての外国語の活用 ・英語ディベートコースによる育成 	<ul style="list-style-type: none"> ・日本語母語話者、日本語力の高い留学生を対象とする日本語N3程度の留学生との合同授業 	キャンパス内 vs キャンパス外 (社会)
GCをどのように評価するか?	<ul style="list-style-type: none"> ・主体的・感覚的評価 (ご自身の経験ベース) 	<ul style="list-style-type: none"> ・言語パフォーマンス能力の評価組み入れ、自己・学習者同士による評価の活用 	<ul style="list-style-type: none"> ・ルーブリック活用による英語ディベート (社会的参画) のチーム評価 	<ul style="list-style-type: none"> ・コンピテンシーモデルを用いた評価 (教師評価、自己評価、他者評価/継続的に進めかける?) 	GC評価 vs GC成果評価
どのようにその成果を可視化していくか?	<ul style="list-style-type: none"> ・学内中国語教育の中国留学との連動 	<ul style="list-style-type: none"> ・教育の現場を変えていくのはとても大変なこと ・仕組みのレベルも変わる人も変えていかなければならない 	<ul style="list-style-type: none"> ・Up for Debateの出版 ・ディベートコース紹介ビデオ 	<ul style="list-style-type: none"> ・立教が目指すGC? 	可視化 vs 社会的認知



ていくわけです。それは大学にとって貴重な資産になるわけです。

やはり大学ですから、知的資産をつくっていくことが大事で、それがあればあるほど、もちろん基金のほうもあればなおさらいいですけども、それがなくても知的な資産があると社会的認知が進んでいきます。その社会的認知をつくる最大の主役は卒業生です。やはり卒業生を大事にしない大学は、今のこの変化の激しい世の中ではやっていけないと思います。現在立教で考えておられるプログラムについても然りです。卒業生を大事にする大学、きちんと認知して、そういう人たちが外でステークホルダーになっていくというのが、今の立教のスタイルからすると、かなりピンとくるスタイルではないかと思えますし、リーダーシップがそれを理解するだけの器量があってほしいと、外野席からですけども思えます。

○丸山 どうもありがとうございました。ちょうどいいバトンをいただきました。お時間も押してまいりましたので、ここで本学の国際化担当リーダーでいらっしゃる松井先生に、総括をお願いしたいと思えます。松井先生、どうぞよろしくお願ひします。